

1 こどもの権利

項目	対話内容
①「こどもの権利」 をこどもたちに周知 する	・ 「こどもの権利」を正しく理解してもらう。 ➤ こどもの勝手・わがままにならないように、「こどもの権利」とは何かを正しく理解してもらう。 ➤ 権利≠好き放題、何が権利で何が勝手なのかきちんと伝える。 ➤ こどもたちに正しく伝えるためには、PTA・教育委員会とこども部局との連携が大切。 ・ 分かりやすく伝えることが大事。 ➤ “宝箱をつくろう” その中で「こどもの権利」のペーパーが入る。 ➤ こどもの権利カルタ。 ➤ 「イカノオスシ」みたいな覚えやすいキャッチフレーズや分かりやすい周知ツール。
②「こどもの権利」 を大人に周知する	・ 「こどもの権利」の本質的な理解を親・大人にしてもらう。 ➤ こどもは保護や支援の対象だけでなく、権利の主体でもあることを理解する。 ➤ こどもの権利をうばわない。 ➤ 親権とこどもの権利の理解。 ➤ 虐待は正しいと思ってやっているケースが多い。 ・ 分かりやすく伝えることが大事。 ➤ 広く大人に知ってもらう工夫（入園時等のいろんなタイミングで知らせる）。 ➤ アナログで目に付くように目にふれるところに掲出する（病院、スーパーなど）。 ➤ 初めて子育てする「親」にシンプルに分かりやすく伝える。 ➤ 周知ツールは大人用も必要。

③こどもが自分の意見を表現できる	・ アドボカシーが大切（自分の意見が言えない子、障がいのある子の意見も聞く、アンケート等でも意見を書けないこどももいる）。 ➤ 気軽に言える環境づくり（毎日来てくれる人）。 ➤ 大人・こどもの関係性が築ければ、こどもの声が聴けるようになる。
④こどもの意見を聴く	・ こどもに関わる大人が学べる仕組みがあると良い。 ➤ こどもに関わる講座シリーズで段階的にステップアップできる仕組み。 ➤ 対象：学校の先生、地域の大人、土曜チャレンジスタッフ等。 ➤ 学校の先生には必ず受けてもらいたい。 ➤ こどもの意見をきく声かけを大人に学んでもらう（親子の声かけ講座）。 ・ 行政だけでなく関係先と連携（役割の振り分け）が必要。 ➤ ここに行ったら聞いてもらえるという環境づくり。 ・ 意見を聞いた後のフィードバックも大切。聴いてもらえていることを実感することで安心、信頼につながる。
⑤こどもの「やりたい」を実現する	・ こどもの意見をきく声かけを大人に学んでもらう（親子の声かけ講座）。 ➤ 自分が思っていることを言葉にできないこどもも多い（高校生あさご未来会議）。
⑥こどもの権利条例の制定	・ こどもの権利についての周知につながる制定過程が大切。 ・ こどもの権利条例の制定の庁内のメリットとデメリット。 ➤ メリット：行政内部で意識されるようになる（これまで意識していない部局にも意識してもらえる）。 ➤ デメリット：行政の内部業務が増える。形式化し、形骸化する恐れがある。 ・ まずはこども計画を推進するところから取り組むのが大切。 ➤ 計画をつくって終わりではなく、計画に取り組むところに時間をかけると、自然とこどもの権利についての周知につながり、条例は不要ではないか。

2 こども視点のまちづくり

項目	対話内容
①こどもの視点をまちづくり（施策）に反映する	・ 審議会等にこどもも参加することは大賛成。 ➤ こどもも審議会に入れるようにする。 ➤ こどもだけの会議を設ける（審議会のこどもバージョンを設ける）。 ➤ 大人も一緒に意見を出し合える会議があっても良い。 ➤ こども未来会議も活用できる。 ・ 意見を言えないこどもの意見をどう引き出すか、多様な手段での取り組みが必要。 ➤ こどものいるところに出向いていき意見を聴く。 ➤ アンケートでは引き出せない想いを対話で引き出す。 ➤ オンラインの双方向のコミュニケーションの仕組みを活用。
②こどものまちづくりへの参画	・ こどもアイデアコンペ等こどもたちが主体になる取り組みはとてもいい。 ➤ 市で予算化するのもいい。 ➤ こども自身で実現するのもいい。 ➤ コンペの選定もこども視点で決められるといい。 ➤ 自分たちの朝来をどうしたいかプレゼンテーションする（年代別に絵画などの作品展など）。 ➤ 物販するなど行政的に難しいところも体験として大切。自分たちで「稼ぐ」体験等（地域通貨やポイントで支払うなどの工夫）。 ・ こどもの気持ちを深く聴く、対話が大切。 ➤ なぜそうしたいのかまで聞く（校則改定など）。
③活動やプロセスを共有する	・ 意見を聞いた後のフィードバックも大切。聴いてもらえていることを実感することで安心、信頼につながる。 ➤ きちんと最後にどうなったかまで伝える。

3 こどもの居場所

項目	対話内容
①多様なこどもの居場所づくり	
②若者が気軽に集い、人と人とのつながりが生まれる場づくり	・ 朝来市は婚活支援が弱い。 ・ 今の若者は飲みに行かない、行く場所はない。 ・ 本屋カフェがあるといい。 ・ サークルが作りやすい環境になるといい（スポーツ、文化系）。 ・ 活動の見える化をすれば参加しやすい。 ・ 若者の自然な出会いコーディネーターがいるといい。 ・ 若者が自ら行動することが必要。 ・ 今の若者はコミュニケーション能力弱い気がする。
③生涯学習センターやコミュニティセンター等の公共施設の積極的利活用	

④こどもの年代や行動範囲に配慮した居場所の配置や機能	・ 小中学生の居場所づくり。 ➤ 放課後に学校でこどもが遊べない。 ➤ 中高生はあさ Go をこども料金に。 ➤ こどもの移動手段が必要（一度学校から家に帰宅すると家から出て遊びに行くことが難しい）。 ・ 高校生の居場所づくり。 ➤ あえてイオンにそういう場所（高校生の居場所）をつくる。 ➤ 高校生は居ることができる場所がない。 ➤ 自分で居場所を作る。 ➤ 集まるだけではなく、集まって何かできる場所がいい。 ➤ イオンはベンチしかないのでたむろしているイメージになる。机を置くなどして居場所をきちんと作れば勉強する高校生もいるのでは。
⑤こどものための公共施設のあり方	・ 公共施設は夜に使えない。職員に依存しない使い方を考えるほうがいい。

4 こどもの遊び・学び・体験

項目	対話内容
①朝来市の自然環境を活かしたこどもの体験の場づくり	・ 大人が遊び方を教える。 ・ あぶない、ダメばかり。川遊び、釣りなど。大人がその機会を奪っている。 ・ 自然の中で遊べていない、外で遊ばない。
②定期的なこどもの学び・遊び・体験の場づくり	・ こどもの体験（土曜チャレンジ） ➤ 地域で生涯学習としていろいろ取組がある。 ➤ コーディネーターが持つノウハウが大きく影響している。 ➤ コーディネーターを増やす。こどもに選ぶ選択肢を増やす。 （いろいろな人が土曜日チャレンジに参画しやすい） やりやすい仕組みをつくる。 ➤ コーディネーター研修を開催する。 ➤ 地域の元気なお年寄りが講師等として参画する（なつかし遊びなど）。 ・ こどもの体験 ➤ 地域ごとに体験できる場がある。 ➤ 子ども版の市民講座のようなものを開催。 ・ 若者の体験 ➤ こどもに接する機会がない人が多いため、こどもに接する機会を作る。
③こどもの遊び・学び・体験の場をつくる担い手の育成	・ こどもと大人のつながり ➤ こどもとの関わり方を学ぶ。 ➤ 担い手同士の横のつながりづくり。

5 切れ目ない支援

項目	対話内容
①相談しやすい環境づくり	・ こどもはなんかモヤモヤ、でも悩みかどうかわからない、相談していいのか迷う状況になりやすい。 ・ 相談した後になんかどうなるのかわかっていれば相談しやすい。 ・ こどもがリーフレットを見て直接連絡することはなかなかないため、アドボカシーが大切。
②地域や居場所と連携したこどもの見守り・支援	・ 地域行事にこどもも参加する。 ・ 相談を受けてもどこに繋がればいいのか分かりづらい。 ➤ こどもに関するすべてのことを相談できるこども家庭センター。 ➤ 行政の中でも担当課が違うため横のつながりが重要。 ➤ 行政に限らず相談の入り口がたくさんある状態が良い。 ・ 社協と行政の連携 ➤ 自治協と社協のつながりを地域ごとにつくる。 ➤ 社協はこどものことも対象だが、高齢者中心になっている。 ➤ 気になるこどもがいる情報を共有し、連携して対応する。 ・ 障がい者も分け隔てなく集まれるイベントのようなものがあるといい。
③学校との連携した相談体制づくり	・ スクールソーシャルワーカーやカウンセラーは、学校だけでなくこどもが集まる地域の場合にも顔を出せば、こどもたちの本当の姿を見えたり、信頼関係も生まれやすくなる。
④経済的不安を抱えるこども・子育て家庭への支援	・ 学校が少なく、行きたい学校が遠いので、交通費を支援。 ・ 受験費用の支援。

⑤ヤングケアラー・若者ケアラーの周知と把握・支援	・ 本人がお手伝い感覚になっており常習化してしまっているが、その子がいないと家庭が回らない状態になっている場合がある。 ・ 特異な環境だという自覚がなく、外で他の子と話していて気づくパターンが多い。 ・ 学校を休んでしまうレベルから、遊ぶ時間がないレベルまであり、線引きの難しさがある。
⑥義務教育終了後の切れ目ない支援につなげるための行政・学校等の情報共有	・ 義務教育終了後、ひきこもりのこどもの情報がどこにもない。 ➤ 福祉と教育の連携が重要。 ➤ 区長さんや民生委員さんが、地域でひきこもっている人の状況をよく知っている地域もある。 ➤ 早い段階でも接点を持つことが大切。
⑦配慮が必要なこどもの保護者への啓発	・ 自らが支援を必要としていない（支援の必要性を自覚していない）人への支援。 ・ 家庭全体への支援。

6 多様な価値観の尊重

項目	対話内容
①こどもと大人の信頼関係の構築	
②新しい価値観を尊重する雰囲気の醸成	・ 若い人が、何が嫌で何を求めているのか知りたい。 ➤ 地域活動の参加者が減少し、団体も減少している。 ➤ 若者の活動を否定されるやり方を変えていかないと若者は活動しづらい。 ➤ 一回嫌なことがあったら若者は行きたくなる、次回以降もう来てくれない。
③若者や子育て家庭が参加しやすい地域活動	・ 若い人が、何が嫌で何を求めているのか知りたい。 ・ 産前産後や仕事復帰後など、地域でサポートするような仕組みがあれば。 ・ 顔見知り同士の関係、頼れると助かる。
④子育てと仕事の両立しやすい職場づくり	・ 認証取得した事業者にとっても、メリットがあることが大切。 ・ 小さな会社は休暇を取りにくい。
⑤仕事や地域活動がしやすい家庭環境づくり	・ 家庭の役割分担については、夫婦で参加できる学びの場や普及啓発。 ・ 家庭への支援も大事。
⑥プレコンセプションケア	・ 子育てがこんなにしんどいと思っていたという声もある。 ・ 産後ケアが大切。